名寄市立大学

授業改善通信

第３号（2020 年４月発行）

目　次

１　実施と変更点　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　1
２　授業評価アンケート実施・結果の報告　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　1
３　基礎演習における評価基準の設定・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
　　編集後記　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
　　アンケート結果を踏まえた分析・改善案（別冊）

１．実施と変更点

前年に引き続き、2019（令和１）年度前期と後期に授業評価アンケートを web で実施した。前年度は前期と後期２回の「授業改善通信」を発行したが、今年度は前期分と後期分をひとつにまとめた。昨年後期と同様、アンケート対象科目を授業担当教員一人につき２科目以上とした。今年度の実施方法について変更点があった。前年度では担当教員がアンケート対象科目を教務係長に連絡してアンケートの認証番号とアンケートコードを入手することになっていたが、今年度では、担当教員みずからが web で自己登録を行い、認証番号とアンケートコードを取得するという方法に変更した。この自動登録により事務作業が軽減された。その他の実施の方法については前年度後期のやりかたを踏襲した。6 月の教授会にて前期アンケートの方針を説明したあと、教員用実施要領を全教員に、また学生用実施要領とアンケート協力のお願いを全学生に web で配信した。後期のアンケートについても 10 月に実施要領を web で教員に配布した。以下、アンケート実施状況およびアンケート結果をまとめた。これらは web で公開する。また、アンケート結果を踏まえた教員による分析および改善点については別冊にまとめ、学内限定で公開する。

２．授業評価アンケート実施・結果の報告

（1）アンケートの実施状況

2019 年度前期の実施人数（助教を含む）は 37 名。学部全体（72 名）の実施率は 51%。学科等別の実施人数は、栄養学科８名、看護学科 10 名、社会福祉学科４名、社会保育学科７名、教養教育部８名だった。実施科目数は 41 科目。アンケート結果についてのコメントを記述した教員は 19 名で、実施教員の 51%だった。栄養学科６名、看護学科２名、社会福祉学科１名、社会保育学科５名、教養教育部５名だった。９月時点でコメントの記述人数が少ないため提出期間を延長したが、増加はなかった。

後期も前期と同じ方法で実施した。実施人数（助教含む）は 30 名。学部全体（71 人）の割合は 42%。学科等別の実施人数は栄養学科６名、看護学科８名、社会福祉学科３名、社会保育学科５名、教養教育部８名だった。実施教員のうち、コメントを記述した教員数は 16 名だった。実施科目数は 53 科目で、前期より増加した。アンケート結果についてのコメントの記入は、13 名で、実施教員の 54%となった。ちなみに、昨年度後期のアンケートのコメントを記入した教員の率は 34%であり、今年度は前・後期ともコメント記入率は上昇した。

※学部全体の教員数及び学科の教員数には、実習関連の科目のみや履修者 10 人以下の科目のみ担当の申告のあった教員は含まない。

2019（令和1）年度アンケート実施状況

		実施人数（教員数）	コメント
前期	栄養	8(14)	6
	看護	10(19)	2
	社会福祉	4(16)	1
	社会保育	7(15)	5
	教養教育	8(8)	5
	計	37(72)	19

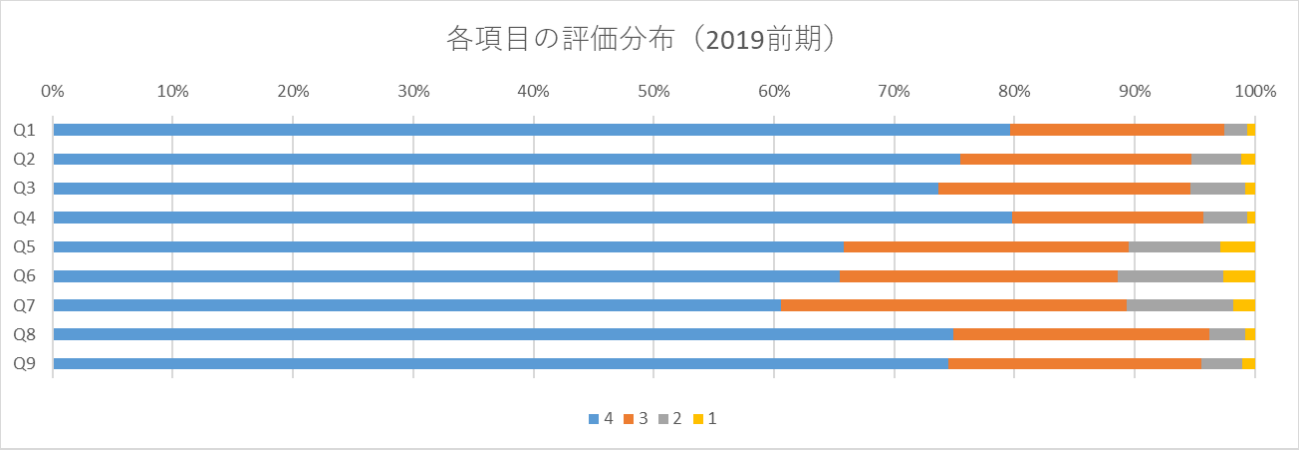
		実施人数(教員数)	コメント
後期	栄養	6(13)	3
	看護	8(22)	4
	社会福祉	3(14)	2
	社会保育	5(14)	3
	教養教育	8(8)	4
	計	30(71)	16

（2）アンケートの結果分析

次に、各アンケート項目の集計結果を見てみる。評価基準は、４．そう思う、３．ややそう思う、２．あまりそう思わない、１．そう思わない、の４段階になっている。

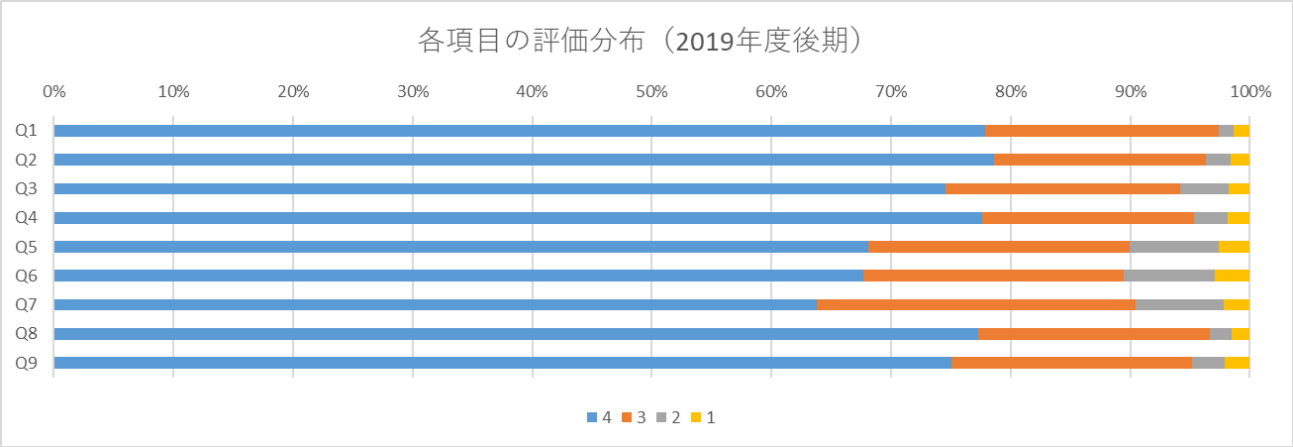
2019 年度前期 授業評価アンケート　全体集計結果　　回答率：43.2%（のべ 3767 人中 1629 名）

質問	4 件数 割合%	3 件数 割合%	2 件数 割合%	1 件数 割合%	平均 SD
１．シラバスに記載された内容に沿って授業が行われていた。	1297 79.6	290 17.8	32 2.0	10 0.6	3.76 0.51
２．授業の構成について、あらかじめ十分な説明があった。	1230 75.5	313 19.2	67 4.1	19 1.2	3.69 0.60
３．成績評価方法について、あらかじめ十分な説明があった。	1200 73.7	342 21.0	74 4.5	13 0.8	3.68 0.60
４．授業に対する準備は十分に行われていた。	1300 79.8	259 15.9	59 3.6	11 0.7	3.75 0.55
５．授業の進め方はわかりやすかった。	1072 65.8	386 23.7	124 7.6	47 2.9	3.52 0.76
６．教員の伝え方（話し方、板書、スライド、実演）は明瞭だった。	1066 65.4	377 23.1	143 8.8	43 2.6	3.51 0.76
７．教員は授業環境の維持に努めていた。	987 60.6	468 28.7	145 8.9	29 1.8	3.48 0.73
８．授業に対する教員の意欲や熱意を感じた。	1221 75.0	346 21.2	49 3.0	13 0.8	3.70 0.56
９．教員は学生に対して適切な対応を行っていた。	1214 74.5	343 21.1	55 3.4	17 1.0	3.69 0.59



2019 年度後期 授業評価アンケート　全体集計結果　回答率：45.0%（のべ 2925 人中 1317 名）

質問	4 件数 割合%	3 件数 割合%	2 件数 割合%	1 件数 割合%	平均 SD
1．シラバスに記載された内容に沿って授業が行われていた。	1025 77.8	258 19.6	16 1.2	18 1.4	3.74 0.55
2．授業の構成について、あらかじめ十分な説明があった。	1035 78.6	234 17.8	27 2.1	21 1.6	3.73 0.58
3．成績評価方法について、あらかじめ十分な説明があった。	982 74.6	258 19.6	54 4.1	23 1.7	3.67 0.64
4．授業に対する準備は十分に行われていた。	1022 77.6	233 17.7	37 2.8	25 1.9	3.71 0.61
5．授業の進め方はわかりやすかった。	897 68.1	288 21.9	98 7.4	34 2.6	3.56 0.74
6．教員の伝え方（話し方、板書、スライド、実演）は明瞭だった。	891 67.7	287 21.8	100 7.6	39 3.0	3.54 0.76
7．教員は授業環境の維持に努めていた。	840 63.8	351 26.7	97 7.4	29 2.2	3.52 0.73
8．授業に対する教員の意欲や熱意を感じた。	1018 77.3	255 19.4	24 1.8	20 1.5	3.72 0.57
9．教員は学生に対して適切な対応を行っていた。	988 75.0	265 20.1	36 2.7	28 2.1	3.68 0.63



アンケート対象科目を２科目以上とした昨年度後期、アンケートを実施した教員数は33名で、実施科目数は56科目だった。昨年度後期と比較すると、今年度前期の実施教員数が４名増となり、後期の実施教員数が３名減となった。また、実施科目数については、昨年後期の56科目と比較すると、前期科目数が15科目減、後期科目数が３科目減となった。

学生の回答率については、昨年度後期は32.3%だった。今年度は、前期回答率が43.2%、後期回答率が45.0%となり、いずれも昨年度後期の回答率を上回った。在校生ガイダンスや全学生メールでアンケートの参加を学生に呼びかけたり、授業時間内にアンケート回答のための時間を確保するなど、さまざまな試みが多少功を奏したと思われる。

学生からの授業評価結果を見ると、表の各項目において評点の３ないし４が多く、全体的に見て、授業に対する学生の評価は高い。昨年度の「通信」でも指摘があったように、実施したのが授業改善に関心の高い教員であるがゆえにこのような結果になったとも考えられる。ただしQ5～7の満足度が低く、それは教員の授業スキルや環境維持に関する項目であった。本学の学生を対象に実施したIRコンソーシアムの調査（2018年度）では、「授業をつまらなく感じた」経験について、１年生は「頻繁にあった」8%、「ときどきあった」52%、2～4年生は「頻繁にあった」10%、「ときどきあった」61%という結果になり、学年が上がるにつれて授業のつまらなさを感じている傾向にあった。また、「授業中に居眠りをした」経験について、１年生は「頻繁にあった」12%、「ときどきあった」49%、2～4年生は「頻繁にあった」13%、「ときどきあった」59%という結果であり、これもまた、学年が上がるほど割合が高い。このように、学生は授業がつまらないと感じて、居眠りをしたという行動を起こしたと推測される。その行動の前後には、教員の授業がわかりにくいから、つまらないと感じるのであり、そして、つまらないから居眠りや私語をするが、そのことについて教員から特に注意されないので環境は維持されていないというように、授業評価アンケートの結果とIRコンソーシアムの調査がつながっていくのである。

IRコンソーシアムの調査は回答率が高く、本学の実態を捉えたものと判断できるが、授業評価アンケートは教員の実施率や学生の回答率がまだ低い状況にあるため、今後実施科目数や回答率を増やしていくことで、大学全体の教育の質がより明確になるだろう。

(3)　次年度の課題

webによる授業評価アンケート実施も２年目となり、実施方法も次第に浸透してきたように思われる。今後の課題はアンケート実施率と回答率の向上である。そのためには、昨年度も述べたように、授業評価アンケートに対する意識・関心を高めるために、教員や学生にアンケートの意義を伝え、協力を引き続き呼びかけていくしかない。そして回答率を上げるために、授業時間内にアンケートを実施する時間を確保し、学生に参加を促す必要もあるだろう。いくつかの科目では授業時間内にアンケートを行い、学生は全員積極的に参加していたように見受けられたが、意外に回答率が低かったということもあった。これはシステムの操作や通信上のトラブルで回答が登録できなかったのか、それとも学生がアンケートに答えているふりをしているだけなのかは明らかではないが、様々な問題点を検証していきながら授業改善の体制づくりを進めていきたい。また、現在授業アンケートは専任教員のみの実施だが、将来は非常勤講師も含めた実施を行い、大学全体の教育力を上げることも考えていく必要があるだろう。

アンケートに対する分析・改善案もぜひお寄せいただきたい。「授業→アンケート→分析→授業改善→アンケート」という一連の流れを繰り返すことによって授業改善の取り組みを可視化することが求められている。

３．基礎演習における評価基準の設定

2019 年４月に示された名寄市立大学に対する認証評価結果では、「少人数グループ学習形式でおこなわれる基礎演習などは、成績評価が担当する教員ごとに行われているため、成績評価の公平性の確保の観点から評価基準の設定が必要である」と記載されている。これまでの基礎演習では、大意要約や小論文添削、ディスカッションなど、演習の進め方に関する緩いガイドラインは設定したものの、学生の成績評価については、出席状況や課題の提出状況を判断する目安を示したのみで、学習成果そのものの評価は各担当教員に委ねられていた。これまでの経験則で述べると、教員が用意したテーマについて所属学生は原稿を書き、指導・修正を繰り返すことで原稿が改善され、この学生はだいぶ書けるようになったと認めて高い成績をつけるというように、担当教員が「学生の伸びしろ」を主観的に評価していたと振り返る。

こうした演習内容や成績評価に関する担当教員への全権委任は、「先生によってやり方が様々で、楽な先生もいれば大変な先生もいる」といった学生の声が絶えず、基礎演習の積年の課題となった。その対策として担当教員の事前打ち合わせや学習会、独自アンケートの実施など、FD 活動の充実で解決を試みたが劇的な変化には至らなかった。次に考案したのが、認証評価で指摘された評価基準の導入である。これを用いて基礎演習で習得すべき能力の達成度を測ることで、個々の学生を真正に評価するのと同時に、評価基準が明確になればそれに伴って各担当の演習内容も修正され、やがて統一化していくだろうと目論んだ。すなわち、統一の評価基準が統一の演習内容を生み、学生に対する公平性を確保するという発想である。

基礎演習における評価基準は、シラバスに記載されている学習到達目標をもとに７つの評価ポイントを抽出し、それぞれＳ（よくできている）～D（できていない）で判定するものである。評価ポイントを下記に示す。

① 要点をつかみながら文章を読む
② 文章を書くための基礎がわかる
③ 文章を書く
④ 情報収集ができる
⑤ 問題発見・解決を探求できる
⑥ 能動的・主体的に学ぶ姿勢を身につける
⑦ ディスカッションする

これらを Excel で入力し、各項目の評価をまとめた総括と出席回数を記録して、所属学生の評価を行えるようにした。評価は前期終了時（中間）と後期終了時（最終）の２回行い、中間評価は集計し担当者間で共有したことで、統一の枠組みから逸れないよう互いに意識した。

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L
1	2019基礎演習評価表			○○ゼミA		中間評価						
2	学籍番号	氏名	要点をつかみながら文章を読む	文章を書くための基礎	文章を書く	情報収集ができる	問題発見・解決を探求できる	能動的主体的に学ぶ姿勢	ディスカッション	総括	出席回数	評価
3	431100	栄養花子										
4	431200	看護月美										
5	431300	社福太郎										
6	431400	保育次郎										
7												
8		評価基準	・S:よくできている		・Sが4つ以上で、Aが3つ以内なら総括はS、素点は95点or100点							
9			・A:できている		・Sが4つ以上で、BかCが含まれるなら総括はSかA、素点は85点or90点							
10			・B:ややできている		・Aが4つ以上で、SかBが3つ以内なら総括はA、素点は80点or85点							
11			・C:あまりできていない		・Aが4つ以上で、Cが含まれるなら総括はAかB、素点は70点or75点or80点							
12			・D:できていない		・あとは各項目のバランスで総括のB、C、Dを判断、素点は60点未満or60点or65点or70点							

今年度は、基礎演習の評価基準を用いた初めての試みである。複数の担当者で共通に実施する少人数方式の演習科目は他にも開講されており、今回の基礎演習を発端にして評価基準の設定を全学的に進めていくことが、次の認証評価で問われる重要課題になるだろう。（文責　教養教育部　石川貴彦）

【編集後記】

『授業改善通信』第３号が発行になった。昨年は前期と後期の２冊を発行したが、今年は、前期のデータ集計に時間がかかり、１冊となった。発行が遅れた責任は授業評価アンケート担当者代表の小古間にある。

大学認証評価の教育に関する評価項目の一つに「学位授与方針に明示した学習成果を適切に把握及び評価しているか」という項目がある。その試みとして連携教育委員会が作成しているルーブリック「連携教育カルテ」を『授業改善通信』第１号で取り上げた。今号では、教養教育部が１年生に開講している「基礎演習」の評価方法をめぐる報告を掲載した。教職員のみなさんにはぜひ読んでいただき、初年次教育の要である「基礎演習」の充実に向けたご意見をいただければと考えている。学内には学習成果の把握方法がほかにもある。すでに実施されているものや、実施に向けて取り組んでいる動きもある。そうした取り組みについて情報を公開し、大学全体で共有していきたい。

発　行　日：2020（令和2）年４月
編集・発行：名寄市立大学・FD・SD 委員会
授業改善ワーキングチーム（代表　小古間甚一）